令和５年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文小学生の部 優秀賞（事務次官賞）

「　災害を経験して芽生えた思い　」

広島県　広島市立瀬野小学校　６年　田中（たなか）　夢芽（ゆめ）

今から５年前の平成 30 年７月、豪雨が私の住む広島県広島市安芸区瀬野の町をおそった。この豪雨により、町の山奥にある団地で土石流が発生した。当時小学１年生の私でも「土」、「石」、「流れる」と連想していくと、町の中で大変なことが起きていることはすぐに理解できた。後日、この土石流で、命を落とした人がいることを知った。瀬野の町は深い深い悲しみに包まれた。

あの日のことを振り返ってみると、夜中一向に止まない雨と鳴り続けるエリアメールに家が浸水したら…川がはんらんしたら…山がくずれたら…と、私も家族も近所の人達もみんな不安で心配でこわくて、とても眠っている場合ではなかった。土石流発生の一報が入ったのは雨がさらに強まってまもなくしてだった。みんな、凍りついた。今は、身の安全を確保してとにかく朝を待とうと話し合って決めた。こんなに朝が待ち遠しかったことはない。

夜が明けて、やっと雨が止んだ。私は、町の変わりように絶句した。雨水が行き場を失い、道が川になっていた。どこもかしこも土砂が流れこんで茶色だらけ、土やどろのにおいもした。流木や岩のような大きな石やごみが流れてきて、あちこち散らかっていた。線路は崩壊していた。橋は流されてなくなっていた。メイン道路はかんぼつしてしまった。でも、土石流が発生した団地は、こんなものではなかった。テレビで見ると、山腹が崩壊し、団地丸ごと流されたようだった。津波かとも思った。自然災害はおそろしい。私はふるえ上がった。

この災害で学校は休校になり、そのまま夏休みに突入した。大人達も仕事に行けない、仕事にならない人が多くいた。でも、このまま時を止めておくわけにいかない。近所の人達の声かけで、まずは自宅周辺の環境整備に取りかかった。私も玄関まわりをそうじした。水分をしっかりふくんだ土砂やそれとともに流れてきた木くずやごみは重くて不衛生だった。虫もわいた。マスクをして軍手をつけての作業は暑いし、なかなかはかどらなかった。それでも誰も手を休めなかった。大人達は駅や周辺の復旧作業にも向かった。地域外の人もかけつけてくれて、連日、汗だくで作業をしてくれた。こうして、多くの人のおかげで瀬野の町は少しずつ息を吹き返した。そして少しずつ本来の自然豊かないろどりも取り戻した。

令和元年６月のある日、町の中心地、ＪＲ瀬野駅南口にある瀬野福祉センターのすぐそばに石碑が設置された。表には「記念碑　西日本豪雨災害」、裏には土石流におそわれて亡くなった人の名前がほってある。この日、私は家族と、確かな防災力を身につけなければならないこと、亡くなった人がいる事実を風化させてはならないことを話し合った。以来、瀬野や近りん地域で防災イベントがある時には家族で参加している。簡易マスクや雨合羽作りのワークショップ、非常食の試食、ＡＥＤや消火器の使用講習、どれもいざという時役に立つことばかりだ。正しい知識を身につけて、私もこの町を守れる人になろうと思う。